平安グランギニョル

なぐ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
平安グランギニョル

【Ｎコード】
Ｎ８２６０Ｆ

【作者名】
なぐ

【あらすじ】
平安時代の陰陽師・安倍晴明の話。捏造が多い友情活劇（？）

００：葛の葉

００：葛の葉

そろそろ日が暮れ、逢魔ヶ刻になろうという頃、森を歩く一人の男が居た。

男の名は安倍保名。この男、もともとはそれなりに位のある武士だったが、ある男に謀られ、一介の武士に成り下がってしまったのだった。しかもこの保名、自分が追いやられた理由がよく解らずに、何で追いやられたんだろうと度々考え込む節があった。

ちょうどそんなことを考えながら歩いていると、前方の叢で何やら動く気配があった。

「何だ？」

保名は身構え、刀に手を掛けた。

（もうすぐ日も暮れる・・・逢魔ヶ刻というからには、妖でもでたか？！）

保名が叢を見つめていると、ひょいと一匹の狐が躍り出た。狐は保名を見つめながら、辺りの様子も伺っているようだった。保名が、動くものの正体が狐だと解ってほっと溜め息をつくと、すぐ近くで犬の鳴き声が聞こえた。

「・・・お前、追われているんだな」

保名がぽつりと言うと、狐が頷いたように見えた。保名は笑って、狐に向かって言った。

「お前は人間様さえ騙せる狐だろう。逃げとおすといい」

保名は言うなり刀をしまい、追う気はないと一歩後ず去った。

狐は暫らく保名を見つめていたが、一度頷くと保名の前を駆け抜けていった。

ややあって、犬を二匹連れた男が二人やって来た。

「お前、狐を見なかったか?」

男は保名を訝しげに見ながら訪ねてきた。

「さあ?知らんなぁ・・・」

保名がとぼけて応えると、男は眦を上げた。

「いや、そんな筈はない。確かにこっちに来たはずだ。さてはお前、我等を謀ろうとしているな!」

「我等を謀ると、痛い目に遭うぞ!」

そう言って、男達は自分達の雇い主の名を言った。驚いたことに、それはまさしく保名を追いやったあの男なのだった。

(・・・何でこう、あの男と縁があるのか・・・)

保名が額に手をあてていると、男達が踊りかかってきた。正直こんなことになると思っていなかった保名は、自分の不運さを呪った。だが、狐を逃がしてやったことは後悔しなかった。

「・・う・・・痛てて・・・」

男二人にさんざん痛めつけられ、保名は這うようにして家に戻った。
「さんざんだ・・・」
今日はもうさっさと寝ようと思っていると、誰かが戸を叩く音がした。
「・・・？誰だ・・・」
もう日も暮れて、夜になった。こんな遅くに来客など珍しい。不思議に思って戸を開けてみると、そこに一人の美しい女が立っていた。
「お前・・・葛の葉か？葛の葉じゃないか！」
保名は驚いて女を見た。葛の葉というのは、保名がまだ位ある武士だった頃の恋人の名だった。
「貴方・・・酷い怪我ですわ。手当てを致しましょう」
「あ、ああ・・・」
保名は葛の葉を招き入れた。葛の葉は慣れた手つきで保名の傷の手当てをしていった。保名はどうして葛の葉がここに居るのか不思議に思ったが、何度訊ねても葛の葉は微笑むだけだった。

やがて、二人は一緒に住むようになり、一人の子を授かった。産まれたのは、可愛らしい少年だった。少年は、童子丸と名付けられた。童子丸はすくすくと育ち、幸せな日々が続いた。

それから、数年。童子丸が五歳の時の出来事だった。
昼頃、保名が所用で出かけようとした時のこと。家の前で女が一人立っているのに気付いた。その女を見て保名は驚いた。
「葛の葉・・・！？」
何故家の中に居るはずの葛の葉が外に立っているのか。保名が家の中を見ると、やはり中で葛の葉が童子丸をあやしている。保名が呆然としていると、童子丸が走り寄って来た。
「母様が二人・・・？こちらにも母様、あちらにも母様」

童子丸がそう言って首を捻っていると、家の中に居た葛の葉が出てきて、その姿を白狐に変えた。

恋しくば尋ねて来て見よ　和泉なる信太の森のうらみ葛の葉

と、一首を口ずさみ、白狐は姿を消した。
呆然としながらも、一旦葛の葉を家に残し、保名は童子丸を連れて信太の森に向かった。
すると、そこに先程消えた白狐が二人を待っていたかのように佇んでいた。
白狐は葛の葉の姿になって言った。
「お許し下さい保名殿。私は以前貴方に助けられた狐で御座います。あの時のお礼をしたかったのと、貴方が私のために怪我をなさったのを申し訳なく思い、今日まで付き添って参りました。騙すつもりはなかったのです」
葛の葉は、童子丸を見た。
「正体を知られたからには、もう傍には居られません・・・童子丸、貴方は私の血を継ぐ、人間の子・・・きっと、数奇な運命を辿ることとなりましょう。けれど、心を曇らせてはなりません。晴れ渡る空のように、明るい心を持つのですよ―」
「母様！」
童子丸の頭を一撫でして、葛の葉は姿を消した。

それから保名は、葛の葉と童子丸と一緒に暮らした。童子丸は産まれた時から不思議なものを見る子だったが、日を増すごとにその力が強くなっていった。
「母様、あれは何ですか？」
「あれとは、どれですか、童子丸」
「あれです、あの黒い―あ、行ってしまった」

「・・・・・」

葛の葉は、童子丸を可愛がったが、心のどこかで、自分には見えないものを見る童子丸に対して、恐れを拭いきれないで居た。

（やはり、この子は、狐の子なのだわ―）

ほどなくして、保名と葛の葉の間に子が出来た。保名も葛の葉も喜び、そちらの子に掛かりきりになった。童子丸も兄弟が出来たことに喜びを感じ、生まれたばかりの赤子を見ようと近付いた。

すると、つい先程まで楽しそうに笑っていた赤子が、童子丸の姿を見るなり泣き出した。

「あら、どうしたのかしら、お腹が空いたのかしら」

「眠いのではないか？」

保名も葛の葉も首を傾げたが、どちらを試しても赤子は泣き止まない。

童子丸は本能的に悟った。この赤子は、自分を恐れて泣いているのだと。赤子が時折、怯えるような目で自分を見るのに気付いたのだ。

両親が赤子に気を取られている間に、童子丸は走って家から飛び出した。

（俺はあの家に居てはいけない・・・）

ただひたすらにそんな気がして、力尽きるまで走り続けた。

どれぐらい走っただろうか。童子丸は、見たこともないような場所に居た。

（ここは、何処だろう―・・・家は、どっちだろう―）

そこまで考えて、童子丸は首を振った。

（いや、たとえ場所が解ったとしても、もう家には戻れない―・・・）

どのみち自分は邪魔なのだ。父は人間の母と、人間の子と暮らした

方が幸せなはずだ。
（狐の血の混じった子など―・・・）
童子丸は、父も、狐の母も恨んでは居なかった。ただ、時々不思議なものを見る力は、要らないと思っていた。
しばらくすると、ぽつぽつ雨が降り出して、やがて本降りになった。もう夜も更けた。じっと暗い地面を眺めていると、視界が滲んでくるのが解った。
雨に紛れて、童子丸は静かに泣いた。
（俺は、生まれてきてはいけなかったのだ）
そうすれば人間の母親が時折怯えたような顔をすることも、生まれたばかりの赤子が泣き出すこともなかったのだ。
（・・・・俺は―・・・）
ぼんやりと顔を上げると、遠くの方に灯りが見えた。その灯りは段々と近付いてきて、やがて人の輪郭を映し出した。
「お前、どうしてこんなところに居る。夜は妖が出るぞ、帰りなさい」
ぼんやりとした人影の口が動いて、そう言った。
「・・・帰る所なんか、ない・・・」
雨に濡れた顔を拭いもしないまま、童子丸は言った。
人影は暫らく考えているような間を持ち、再び口を開いた。
「―お前、名は」
童子丸は、名乗ろうとして、思った。ここで本当の名を告げたら、家に返されてしまうかもしれない。その時、ふと、信太の森で消えた母の言葉が蘇った。

―晴れ渡る空のように、明るい心を持つのですよ―

「・・・い、めい・・・」
「うん？」
「―晴明・・・俺の名は、安倍晴明だ」

童子丸は、そう言って顔を上げた。人影は「そうか」と言って灯りを掲げた。すると、初老の、優しそうな男の輪郭が浮かんだ。

「儂は賀茂忠行じゃ。晴明よ、儂と一緒に来るか？」

人影、賀茂忠行―は、童子丸に手を差し伸べた。童子丸は、暫らくそれを呆然と眺め、やがて、手を伸ばした。

掴んだ大きな手は、雨に濡れていて尚、温かかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8260f/

平安グランギニョル

2010年10月10日01時33分発行